



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの 医療センター

アートプロジェクト

— 今月のショット —



ひだまりの丘(重症心身障害者)病棟の
師長さんと考えた掲示板

2015年 12月号

— 院内の小さな声から —

ひだまりの丘病棟の入り口扉には以前、左の写真のように多くのお知らせが貼ってありました。その月に行った行事について療育指導部の皆さんが心を込めて作ったものです。でも、師長さんは悩んでいました。この入り口の扉には常時鍵がかかっていて、毎回スタッフを呼び出して解錠してもらわなくてはならないため、面会の来られた方にゆっくりとここで立ち止まってお知らせを読んでもいただく暇がないのです。だからといって病棟の中の掲示板にお知らせを貼ると、間違えて食べてしまう入所者さんもいるため開院以来病棟内の掲示板には何も貼れない状態が続いていました。そこで師長さんとサイン業者さんと一緒に考えたのが右側の写真の製品です。この透明なカバーの周りはマグネットになっていてしっかりと掲示板に張り付き、素手では外せません。お知らせをカバーするので安心です。入れ替える際は特殊な吸盤を使えば簡単に外せます。この製品のお陰で、面会に来られたご家族の皆さんが病棟内でゆっくりと読んでくださるようになったそうです。



— よりよくなるために —

病院でアートの仕事をしている。と言うと、「アートって、具体的に何をしているのですか。壁画ばかり描いている訳ではないでしょうし。」と聞かれます。「まあ、いろいろ」です。と、笑ってごまかすこともありますが、今日は少し具体的にお話してみたいと思います。当院では病院建設の際に全面的にアートを取り入れました。外壁から内壁、病室の壁紙選びから建具選びまで。その段階では建築家、建設事務所、デザイナー、造園家、沢山の専門家が同じテーブルを囲んで知恵を出し合って「病院」を作り上げてゆきます。建築家は病院幹部の皆さんの方針や各部署のスタッフの希望を聞きながら図面を描いてゆきます。その図面を元に建設事務所は材料を発注し、実際に病院を建てるのです。でも、いざ、病院が建ってみると、その専門家達はクモの子を散らすように皆いなくなってしまう。その「病院」に今度は1000人以上のスタッフが入ってきます。そして一日に800人近い患者さんが病院に診察に来る。それだけ多くの方が「病院」の中で生活し始めると当然、いろいろな不具合に気がきます。「この案内、わかりづらい」「ここに掲示板が欲しい」「このエリアにイスを増やさないと患者さんが困る」「殺風景でさみしいからなんとかして欲しい」など。そんな時こそ出番です。企画課の施設担当のスタッフと一緒に現場に出かけ、どうすればいいかを考えます。もちろん、予算もあることですから何でもカタログで選んですぐに注文する。という訳にはいきません。壁画を描くことで解決することもあります。今、表示されている案内板の内容を再検討することで問題が解決することもあります。そのエリアの全体の雰囲気や調和したイスやテーブルを選んで設置する場合もあります。病院建設の際にどうしてこの色にしたのか。どんな想いでこの病院を建てたのか。という物語(歴史)を語り伝えるのも大切な仕事です。今、ここで働くスタッフと共に医療環境をより良いもの改善してゆくこと。日々、表出してくる問題から目をそらすことなく、知恵を出し合い、時には病院の外にいる誰かの助けも借りながら、共に病院を創造してゆくこと。問題解決のためのものづくりを通じて多くの人がつながってゆく「場」を病院の中に作ること。それがホスピタルアートディレクターの役目です。

作家名: 小阪 真生